

研修員番号 A-009

所属府省 総務省

氏名 浅見 仁

派遣先 佐賀県武雄市

「地方自治体実地研修を終えて」

1. 研修の概略

初日は、市の概要、行政改革の取り組みや財政状況について説明を受けた後、市役所内及び支所¹を見学した。また午後からは税金徴収業務を体験し、差し押さえ業務に同行した。最後に市長の講話を伺い、意見交換を行った。

2 日目は、道の駅「黒髪の里」において、地元商品の販売体験、生産者の方々との意見交換などを行った。午後は地元の農家にお世話になり、チンゲン菜の苗植えや種まきを体験した後、農家の方との意見交換を行った。

3 日目は、消防署に赴き、消防防災業務を見学した。次に国土交通省の河川事務所において武雄市の水害対策について伺った後、市民病院において病院の医療体制の現状、民営化に至る経緯などについてお話を伺った。午後はリサイクルセンターにおいてペットボトルや空き缶のリサイクル業務を体験した。

4 日目は、武雄市の地域戦略の要ともいえる「レモンガラス」と「いのしし」について、各々を所管する「レモンガラス課」と「いのしし課」それぞれから話を伺い、いのしし肉の加工処理施設やレモンガラスの生産の現場を視察した。またレモンガラスを用いたポーチ作りなどを体験した。午後は武雄市の観光資源について理解を深めるため、観光課の方の案内により、陶芸体験や温泉施設の見学を行った。

最終日にあたる 5 日目は、浄水施設を見学した後、武雄市の新規採用職員との意見交換を行った。

2. 感じたこと

今回の研修を通じて最も印象に残ったのは、行く先々で触れた地域の方々の温かさであった。例えば道の駅では、地元特産の野菜をどのように食べたら美味しいか、旬はいつなのかなどを丁寧に教えてくれた。また「まちかど案内所」では、特産品のレモンガラスを用いたハーブティーの美味しい入れ方やレモンガラスの色素を用いた焼き物についての説明をしてくれたり、いのししの加工処理施設ではいのししの食べ方のみならず、施設長ご自身の農家としての体験や田舎暮らしについてなどを教わったりすることができた。こうしたことはすべて、自分たちの住む武雄という町を少しでも知ってもらいたい、という思いがあってこそできるものだろう。

地域の人々のこうした姿勢を語る上で、樋渡啓祐市長の存在はどうしても欠かすことができないだろう。平成 18 年 4 月に武雄市長となった樋渡氏は、テレビドラマ「佐賀のが

¹ 現在の武雄市は、平成 18 年 3 月に 1 市 2 町（武雄市・北方町・山内町）が合併して誕生したものである。これに伴い、庁舎として使われなくなった旧北方町と旧山内町の旧町役場が、新しい武雄市役所の支所の役割を担っている。

ばいばあちゃん」のロケ誘致、市内在住の62歳から91歳までのおばあちゃん7人によるアイドルグループ「GABBA」

（「ガバ」、3文字目は左右反転）のプロデュース、レモングラスやいのししの特産品化の試み、武雄温泉のシンボルである楼門前の温泉通りにおける「楼門朝市」の開始、機構改革による「佐賀のがばいばあちゃん課」「レモングラス課」「いのしし課」の新設など、一見奇手とも取れる斬新な政策を次々と打ち出している。こうした市長の取り組みの根底には、「知名度がないところでいろいろ取り組んでも効果は薄い」「知名度を上げていくことが、武雄市のブランド力を上げ来訪者を増やすことにつながる」との考えがある。そして、こうした姿勢は、対外的に武雄の名を売り出すこと以上に、地域の人々の意識を変えろという意味で大きな効果を発揮したように思う。就任後最初の目玉事業が「佐賀のがばいばあちゃん」のロケ誘致であったが、ロケには1000人以上の市民がエキストラとして参加したほか、婦人会の炊き出しやボランティアスタッフ、交通整理、方言指導など、市民総出でのロケ支援が行われたという。こうした活動により、市民の地域に対する「自信」が醸成されたことは想像に難くない。市長の打ち出す斬新な政策は、地域の人々がこれまで忘れていた、地域に対する「自信」「誇り」を取り戻させ、さらには市民に「もっと自分たちの地域の良さを知ってほしい」という自発的な思いを持たせるのに十分なインパクトを持っているように思う。市長には直接お会いしたが、まちづくりにかける意気込み、エネルギーには圧倒された。そうした熱意あふれる市長が旗を振り、市民がそれに触発されるという好循環が生まれているように見受けられた。

もちろん、こうした市長の手法に戸惑いや批判がないわけではない。市長が市民病院の民間譲渡を決定した際には、医師会などからの反発を招き、リコールを受けるに至った（その後再選）。また市役所の一部の方からも、「市長がわがままを言っても行政がうまくやっていけるのは、職員ががんばっているからだ」といった声が聞こえてきた。市長が思い切った施策を打ち、自ら先頭に立って武雄市をアピールしていくことを、市役所の職員全員が快く思っているわけでもないようだ。

このことは、市長自身も認識していた。市長によれば、「以前は脚本・演出・役者をすべてこなそうとしていたが、最近は照明係に徹するようにしている」という。これは市長自身が乗り出さなくても、市長の熱意に触発された市民が自ら考えて動き出す体制ができてきていることを示していよう。我々が訪れた際、武雄市では陶芸の催しが開かれていたが、これは市長の手法を快く思っていなかった人々が、いわば「反作用」として自発的に企画してくれたものだ、と市長自身が嬉しそうに話してくれた。さらに、市職員の中にも、行政が呼び水となって市民の活動がどんどん活発化していくことで市の展望が開けてくる、という「市長イズム」が確実に浸透してきていることを、若手職員との懇談などから感じることができた。武雄市の地域活性化の試みを、いかに市長に属人的なものにせず、将来まで継続させていけるかは、こうした波及効果がどこまで表れるかにかかっている。

以下、感じたことについて2点ほど記述する。

一点目は、合併の効果である。合併にはメリット・デメリットの双方があるが、従来は存在しなかった新たな地域資源が生まれる、というのは合併の大きなメリットだろう。しかし、たとえば旧山内町の道の駅で話を伺ったところ、置いてあるのはほとんどが山内産のものであり、今後も旧武雄市や旧北方町のものを積極的に売り出す予定はないという。

コミュニティとしてがんばる姿勢には好感が持てたものの、合併のメリットを生かすという視点はそこには存在していなかった。これからは、新市全体として合併の効果をどう生かしていくかをより考えていくべきであろう。

もう一点は、県との関係である。温泉施設を見学した際、大正天皇の訪問に向けて作られた浴槽があったのだが、その上には醜悪とも言えるような屋根状の覆いがしてあり、そこに小さくくり抜かれた小窓を通してしか浴槽を見られない状態になっていた。話によると、この浴槽は県の文化財に指定されていたため（現在は国指定）、県が文化財保護の名目で、市の観光課等に相談なく覆いを設けてしまったとのことだった。しかし我々が見た限り、その覆いは観光客の興を削ぐものと言わざるを得ず、市の観光課等との相談があればもう少し別の保護の仕方がありえたのではないかと思われる。県と市の相談体制、また観光と文化財保護などの行政の縦割りの仕組みなどについて、工夫する余地があるように感じられた。

3. おわりに

今回、住民の方々と最も近い立場で仕事をされている方々とお話することで、地方の頑張りや、対話と情報交換の必要性を理解することができた。また市長が国家公務員出身者であったため、地域の視点と国の視点の両者を行き来しながら研修に臨むことができた。

最後に、我々が有意義な研修を行うことができたのは、市職員の方々、地域の方々の本当に温かい心づかいがあったおかげである。お世話になった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。